

今俳句が面白い

毎週木曜日、午後7時からの4チャンネル。「プレバト」が楽しい。前半部分の「俳句の才能査定ランキング」は俳句を作ってみようかな、という気にさせてくれます。特に夏井いつき先生と出演者のやり取りには笑ってしまいます。夏井先生の毒舌もさることながら、その添削で、言葉の選び方使い方によってより深みのある俳句に変化していくのに感嘆させられます。この番組を見たら、俳句に挑戦したくなる人が増えるのではないかと、ひそかに思っています。

最初の人が五・七・五音の句(長句)を詠みます。この第一句目を発句(短句)として、時候の挨拶がわりにいわ



る季語を入れるのが習いです。続けて別の人(七・七音の句(短句))をつけます。これを脇と言いい、さらに第三句目を誰かが詠みます。こうして長句と短句を交互に詠んでいき、三十六句目まで続ける遊びです。

俳諧師として有名な人たちが出現するのですが、江戸時代になって俳諧をそれまでの言語遊戯から芸術の領域までに高めたのが松尾芭蕉と言われています。

時は明治時代に移り、正岡子規によって「俳句」が文芸として確立するのですが、「俳諧連歌」の最初の「発句」こそが俳句の原形なのです。つまり五・七・五の十七音に季語を入れた有季定型が俳句の基本的な形式です。

俳句は、心地よい韻律(リズム)を感じます。十七音と言うより五・七・五で成り立つからなのでしょう。古くから五七調や七五調の和歌が詠まれ、新しくは新体詩、他に民謡や童謡、歌謡曲も五音七音の日本語の調べが生かされています。こうした日本語のリズムが俳句を支えていると言えます。

俳句に挑戦するには季語を知ることが必須です。俳句で用いる季語は「歳時記」という本にまとめられています。俳句で詠まれる季節は、日常で感じるより早目に始まります。季節を表す言葉として用いられている24節気がありますが、ここで立春から立夏の前日までが「春」となります。以下夏秋冬も同様で、立春(2月)、立夏(5月)、立秋(8月)、立冬(11月)と季節の始まりが早くなるのがわかります。

俳句の季節は、春夏秋冬と新年(元旦から15日まで)があり、更に各季節の季語は時候、天文、地理、人事、行事、忌日、動物、植物などの項目に分類されています。歳時記には興味深いことがたくさんあって、これを読むだけでもなかなか楽しいものです。

「風光る」「水温む」「半夏生」「鰯雲」「寒稽古」など一目で季節が浮かび、一度使ってみたいと思うような季語がたくさんあります。歳時記には、それぞれの季語を使った俳句も一緒に掲載されていますので、使い方も理解できます。

いい俳句にたくさん触れること、より多くの季語に慣れることが上達するための基本と言えましょう。歳時記を手元において、さあ、俳句を始めましょう。高9回卒の西堀寛厚さん(西堀寛厚)にお願いして、俳句を提供してもらいました。情景を思い浮かべながら読んでみてください。

犬の句

西堀寛厚

私は犬を飼っていましたが、犬の句をたくさん作りました。

次は三紙誌に入選した拙句です。

ホトトギス 十句

雪降るや遣伝子はるかスイス犬

犬と行く歩道に残る寒さかな

犬とわが体温の差やそぞろ寒

犬の毛の逆立ちをりぬ神無月

犬の行く方へ歩めり冬の果

犬曳きて腰にさしたる団扇かな



石段を上りて犬と門涼み
犬逝きし庭の静寂や薄紅葉
数へ日の目にも耳にも逝きし犬
春の川犬の思ひ出ありありと

京都新聞俳壇 九句

犬連れて人渡りゆく冬の橋

白き息犬にかければ尾を振りぬ

春障子犬ははげしく人呼べり

犬止めてしばし緑陰の人となる

犬とある時はさらなり夜の長し

犬に膝舐められてゐる端居かな

犬の掘りし穴に一葉鎮もれり

すでに犬の丸く寝るや秋の風

美人だと犬褒めらるる小春かな

日本の民芸俳壇 三句

犬に吾は寝止月だと言ひふくめ

手枕で犬の寝てゐる暮春かな